

＜秋の金銀＞キンモクセイの開花はオレンジ色の小さな花を見るより先に漂ってくる芳香で気付きます。キャンパスには白い花を付ける“ギン”モクセイも“キン”のごく近くに植わっているのですが“キン”より香りが弱い上に2週間ほど早く咲きだすため昨年は花を見逃してしまいました。



(モクセイ) モクセイ(木犀)といえば“ギン”を指すようで、名前のセイは樹皮がサイ(犀)に似ているためとのことです。ところでキンモクセイの実を見たことがありません。調べたところ、随分昔に大陸から持ち込まれたのがオス株だけだったからとのことです。そうすると日本のキンモクセイは皆、何株かのクローン？今の時代になっても何故メス株が持ち込まれないのかな？と考えてしまいます。



＜風に任せて＞丈の大きな草の天辺で白い綿毛が日の光できらきらと輝いています。綿毛(冠毛)を付けた種は名残を惜しむかのように白い塊に少し引っ掛かりながらもそよ風に吹かれて離れていきます。荒れ地に早々と芽を出すダンドボロギクの種です。“ボロギク”とは冴えない名(ダンドは地名の段戸)ですが、まさに蕾からいきなり種になったのかと思うほど大きさ、形、そして色も目立たない花を付ける草です。



＜ダンドボロギク＞

＜思い草＞荒れ地に強くて風任せで殖えるといえバススキもそうですね。日当たりのよい道路脇や丘の斜面などで風に穂をなびかせています。このしたたかな草の根元を見ると背丈が20cm程のパイプを立てたような形をした赤紫の花が咲いています。ススキの根に寄生する“ナンバンギセル(南蛮煙管)”です。時には宿主を枯れさせるほどの力があるのですが俯(うつむ)き加減に花だけが咲いている姿からか、万葉の昔から“思い草”として歌に詠まれています。



＜ナンバンギセル＞

(思い草)「道の辺の 尾花が下の 思ひ草 今更さらに 何をか思はむ」(万葉集 詠み人しらず)

＜小さな不思議＞涼しくなってきたトンボも大分に姿を消しましたがアカネの仲間の子孫を残すべく頑張っています。ここにはアカネたちの翅を休める姿を紹介します。まずはミヤマアカネのカップルの真西を向く見事なパフォーマンス、偶然ではなさそうですね。そして不思議な力を持つ(?)指に留まるアキアカネ、さらに留まるとすぐに尻尾を挙げるナツアカネです。

(文と写真：松本正勝)

